

## 新刊紹介

### 唐中期の淨土教

(特に法照禪師の研究)

塚本 善隆 著

今迄にもなされた支那佛教史に關する著者の殆んど全部は或は經典翻譯の歴史か或は教理の變遷を辿つた宗派史の研究であつて、一般の文化社會の狀態との關聯に立つた佛教の變遷を究明したものでなかつた。本書は唐中期の社會狀態を洞察しつゝ、それと關聯して消長してゐた佛教特に淨土教の相姿を明白にされしもので此の意味に於て、支那佛教史研究に新なる分野を開拓された著者に先づ敬意を表するものである。而して亦支那淨土教史に於て善導以前は比較的に研究されてゐるが、善導以後の淨土教史は著しく不明のうちにあつた。この暗黒時代に於ける高僧法照の傳記を中心として唐代中期の淨土教を闡明にされた著者の勞に再び感謝するものである。

目次を挙げれば次の如し。一、緒論(支那佛教の性質と淨土教) 二、代宗・德宗時代の長安佛教 三、代宗・德宗時代の佛教諸宗派 四、淨土教の發達普及(特に長安を中心として) 五、法照傳研究資料の檢討 六、法照傳考 七、法照の著述 八、

五會念佛に就いて 九、五會法事讚所收の讚詩に就いて 十、飛錫並に少康の念佛教に就いて 十一、法照の淨土教批判 十二、餘論(法照淨土教と日本淨土教との關係)

上開元天寶の文化燦爛時代を頂き下晩唐の廢頹期に移らんとする過渡期が代宗德宗の時代である。而してその文化燦爛期を出現せしめたものは都長安の貴族社會であつて、彼等は極めて奢侈的生活に流れて感情的享樂的となつた。従つて其處には理智的なるものは遠ざけられ美的なものが迎へられ、且精神的不安が起る。かゝる貴族社會に迎へられた當時の佛教も右の如き色彩を濃厚に有するものであつたこと論を俟たぬ。しかもこの傾向は安史の亂後奢侈生活の復興と共に益々助長せられて、佛教も關聯して、貴族的祈禱的現實的なるものであつた。即ち當時の佛教は、貴族によつて維持された伽藍佛教であり、三世因果應報の思想を基礎とせる修功德の祈禱的佛教であつた。従つて其處には高遠なる哲理を説く論宗よりも神秘的靈感を説く經宗が喜び迎へられたわけで此の點念佛宗は極めて好都合の地位にあつた。殊に安史の亂の如き現實の戰禍を嘗めし當時の人々には淨土教は最も相應しき宗教であつたに相違ない。法照はかゝる時代に出で、かくの如き社會狀態に順應した淨土教を弘宣したものである。否か、る時代に出た法照の淨土教はかくの如き時代色に色彩られたものであつた。法照の傳は諸史料に見えてゐるが彼は四川の人。生死の年月は不明、出家後慧遠の芳躅を慕ひて廬山に入り、念佛三昧を修し、後南嶽の承遠の門に

## 隋の高祖文帝の佛教治國策

山 崎 宏 著

投じた。大曆年間五會念佛法なる音樂的唱名法を創めた。後或は五台山に遊び或は都長安の章敬寺に於て朝廷の歸依を受けつゝ淨土念佛教を弘宣した。而して淨土教傳導者としての彼の活動時代は大曆貞元中である。彼の著述としては從來「淨土五會念佛略法事儀讃一卷」のみ傳はつてゐたが近時燉煌に於て「淨土五會念佛誦經觀行儀三卷」のうち中下の兩卷が発見せられた。彼が大經の所説を基礎として創めた五會念佛は南無阿彌陀佛の唱法を、高低緩急を異にする五種に分つて行へるものであつて、極めて音樂的なものであつた。法照と同時代の淨土教界の代表者に飛錫と少康とがゐた。前者は帝室の歸依を受けて、三階教の普佛普敬の説を傳承し、諸教雙修の傾向があつた。後者は南支那の庶民階級に通俗卑近なる歌曲を以て念佛を弘宣した。即ち飛錫には著しき綜合雙修的傾向が觀取され少康には甚しき通俗化が認められ、而して法照にはこの兩方面が現はれてゐる。法照の淨土信仰は承遠、慧日、善導、道綽、慧遠等就中善導教に導かれたものであり、彼の所依經典は小經、大經、觀經、般舟三昧經であり、彼の淨土教は所詮念佛主義であり、口に名號を稱する稱名念佛の實踐にあつた。

以上本書の概要である。松本博士の序、索引、英文の要約文、圖版八、地圖一、を附す。(四六倍版。約三百五十頁、東方文化學院京都研究所發行)(野上)

本書は佛教法政經濟研究所モノグラフィ第八輯として發行されたものである。内容目次は左の如し。一、序 二、隋諸皇族及び文帝の佛教信仰 三、二十五衆の勅任 四、五衆の設定 五、開皇仁壽の交に於ける佛教排除と佛教の保護弘宣 六、仁壽年間に於ける送舍利建塔事業 七、佛教治國策の樹立に就て 八、佛教治國思想に關する一考察。

「自古篡國之易。未有如隋者也」と那珂博士が説かれし如く、北周の大丞相楊堅即隋の高祖文帝が北周靜帝の禪を受けて帝位に即き、天下統一の事業を行ふたに就ては、その初め武力的工作の特筆すべき程のもの無かつた事は云ふまでもないが、兎も角西晋以來二百六十年分裂に分裂を重ねた中國の統一を完成した事を思へば、彼文帝が明快なる頭腦によつて不斷の平和的工作に多大なる思慮を拂ひしものなるべく、「新統一國家の完成」と云ふ目的に様々なる政策を行ふたものであつた。而して文帝は儒教的德治主義に相當の關心は有してゐたが、なほ且彼が新國家統一の思想的指導原理を佛教に求めた事は否み得ないところである。此點に着眼して、社會教化の上に乃至思想界の統一の上に、文帝が如何に佛教を利用善用したかを究明したものが本書である。

著者は先づ文帝の長子太子勇、次子晉王廣(煬帝)三子秦王俊、文獻皇后等皆熱心なる佛教信者なることを指摘して、隋帝室と佛教の關係淺からざるものなることを證し、更に文帝自身よき在家佛教徒なることを其の日常生活より明かならしめて、彼が行ひし佛教治國策の代表的なる二十五衆の問題に論歩を進めてゐる。而して二十五衆とは開皇十二年始めて勅選せられた二十五人の高僧の教化團體で、その主要人物は京師を中心として活動して佛教々々に當りしもので、官の給與を受けたこと勿論であると結んでゐる。次には五衆が取扱ふてゐるが、これは前者と同年の開皇十二年勅により長安城内に立てられた大論、講律、講論、涅槃、十地の五種の僧伽で、文帝治世の間は存続したらしく、官權の保護に依つて組織的に専門的佛教々化を完全ならしめんとした機關である。

佛教の普通教化を目的とした二十五衆と専門的教化を目的とした五衆とは文帝の佛教治國策の重要部分を占むるものであるが今迄この問題に注意した學者は殆んどなく、著者の研究は新たな注意を引くものであらう。次に開皇仁壽の交に彼文帝が國家政策上佛教に對して殆んど期待を持たなくなり、佛教に對する保護の益々盛になつたことを述べて、更に仁壽年間に於ける文帝の送舍利建塔事業に論を進めて、それが建立の地理的分布状態を諸文獻によつて調査校合して、この事業の後世への影響にまで論及してゐる。而して斯くの如き佛教治國策を樹立した原因は、文帝の個人的信仰及び當時の佛教の隆盛なりし爲めでも

あらうが、當時の社會狀態及び思想界の動向が明快なる頭腦と卓越せる政治的手腕を有した文帝によつてよく洞察されたが爲めでもあらう。文帝は巧に信仰と王法と佛法の三者を識別して統一國家を完成せしめたものであり、當時の財政的富裕さば亦この事業の助成の一因でもあつたらう。これ著者の結論である。(假綴菊版約七十頁) (野上)

## 維新精神史研究

德 重 淺 吉 著

歴史の研究が社會的現實の問題として切實に要望せられてゐる今日、而も著者德重先生が現時の國史學界一部の風潮に對して不滿の意をいだきつゝ、學的省察に、もとづく維新史の再檢討の爲めに其の十餘年間の御勞作なる諸研究を系統的に編して斯界に送られたのが本書である。

本書の地位或はその學的御努力たるや既に西田直二郎博士の序文並に小西重直博士の推奨の辭によりて充分である。我々學徒の慶賀に堪えない所である。

本書を通じて我々の心を打つものは連筆の生々とした論理的な強さと事實の嚴密なる探索である、是元より先生の史觀或は研究方法そのものより出づるものであらう。即ち「歴史はどこまでも過去の國民なり、個人なり社會なりの實際的活動に關係し、それ等の歴史的個體の活動を通じて、それらのものが懷抱

し追求してゐた理想と、その理想實現の有様とを跡づけ、是に依てそれら歴史的事件の文化的意義を闡明し終には或人なり社會なり時代なりが動かされてゐた最高の精神即ちイデオを知らんとするのであるとの目的を以て思想史の研究にあたられてゐる。何故ならばこのイデオの發展した経路こそ文化發展のあとかたであり、このイデオこそ各時代をしてその時代獨特の文化價值を創造せしめるべきものであつて、而も是によりて動かされてきた人間の文化的活動は思想に於て最も直接的であるが故に思想の内容性質方向等を知る事は其時代の文化と其の特質を知るに捷徑であらうと著者の意見である。かゝる見地に立つて先づ日本プロバなるもの、意識の究明から筆を起し日本文化の獨立を鎌倉末期室町中期以前なりとし、而も是を價值づける教學の發展過程を考察して皇道なる名のもつ内容をして日本教學の大成なりと論じ、然しかゝる理念の發現と國家乃至社會等との關係を明かにせんとして幕末の政治、社會狀態、思想並に一般人の知識等を述べ遂に維新改革の根本的な指導精神にまで筆を深めてゐる。即ち第三章幕末政治の特殊形態、第四章幕末武家生活の一面、第五章幕末に於ける非常時の意識と蘭學者の貢獻、第六章幕末一般人の洋夷觀、第七章王政復古の思想的背景などの諸章に於ては幕末に於ける社會組織及經濟生活の行き詰り、國史の回顧に基ける皇道觀念の普及外國の刺戟などを起因とせる幕政改造論について述べそれを發展的に、一、庶政改革論、二、外交論、三、藩府處分論の三期に區分して説明し徳川幕府存立の精神と時代の新機運との矛盾を考察し、そ

の間において日本國理念の進展の方向を事實に於て示してゐる。即ち第九章志士の本領、以下の諸章、第十四章維新革創期の學政學校並に皇漢兩學派の論争、第十五章維新改革の指導精神に於て勤王の志士の精神、或は皇道に對する研究はその主なるものであらう。かくて當然導き出されるものは維新史を生命づける可き理念即ち指導精神である。然り而して維新改除の指導精神は神武創業の精神なりと斷定し其の理念に導かれたる人間の文化的生活のあとかたを、第十六章維新前後の基督教問題と思想統一運動、第十七章廢佛毀釋と大教宣布運動などに於て敘述し續いて明治文化の特質を論じてゐる。

要するに先生の維新改革に對する態度は實に其の運動を以て日本民族の建國以來の國民生活の總決算その再建設の大事業なりとし、而も神武創業の指導精神なるよりして維新改革は神代にまで、つながり從つて維新精神史の研究によりて日本の過去、の歴史も理解し得ると考へられ、最後に日本精神の意義、本領、針路なる章を設けられた所以なりと云ふ。

かくて本書は諸研究を網羅したものであるが、その底を一貫せるものがあり内容的には脈絡がある、而も單なる維新精神史研究に止まらず、そこには尙著者自身の世界觀がはうふつとしてゐるを感ずる。思ふに維新史に關する研究は多々ある事だらうが精神現象を敘述せる書は僅少である、而も本書は觀念的な精神現象を對象としてゐてもその敘述に於ては實證的立場をとり、あくまで其の時代人の心の中を見きばめんとしてゐる點にその特色を存すると考へる。實に本書の如きは現下の國史學界に投じだる一巨彈とでも云ふ可きか、國史學研究者の是非讃味すべきものである。(發行所 立命館出版部 菊版七九六頁。定價金六圓)(富田)